

自ら授業改善に取り組む教員を支える校内研修の構築

～セルフチェックシートの校内研修への活用を通して～

木村 哲（学校経営コース）

1 はじめに

これからの教育では、子供の資質・能力の育成を目指していくことが重要であり、教員には子供の資質・能力を育成する責務がある。実習校校長との面談で、「学校では授業が一番大切である。」「日々の授業を改善して、生徒が主体的に学ぶような授業づくりを求めている。」「現在職員が多忙で、授業について話し合う機会がない。」といった話があった。このように、今日の教育現場を背景におきながら、子供の資質・能力を育成するための授業改善に焦点を当てた校内研修のシステムを構築することが、今後より重要になると考える。

2 校内研修の重要性と課題の明確化

資質・能力の育成を目指している学校現場において、参考文献を基に校内研修の重要性を考察するとともに、実習校での調査を基に校内研修の課題を明確にする活動に取り組んだ。

(1) 学校におけるカリキュラム・マネジメントの重要性

学習指導要領解説の総則編によると、これからの学校教育では、各学校で育みたい資質・能力を明確にし、学校教育全体及び各教科等の授業で育成していくことが重要であると明記されている。したがってカリキュラム・マネジメントでは、「目指す生徒の姿」を共有することが重要である。また実習校では、国立教育政策研究所で示されている「基礎力」を基に、育成を目指す資質・能力を明確に定めていた。

(2) 校内研修の重要性について

校内研修は子供の資質・能力を育成するために必要不可欠である（『「チーム学校」を創る』（高木展郎・三浦修一・白井達夫，2015）や「資料1 義務教育特別部会における審議経過報告（案）」（義務教育特別部会（第10回）・義務教育特別部会（第11回）合同会議 配付資料，2005，を参照）。また校内研修には、教員の資質・能力の向上の役割も併せ持つ。以上から、学校で定めた子供の資質・能力を育成するために、教員一人一人が主体的に取り組む、授業改善を目指した校内研修を組織することが求められている。しかし教育現場では多

忙のため、このような校内研修が実現され難い現状がある。

(3) 授業参観を通しての課題の抽出

実習校の授業参観を通して、教員が授業力を向上させるためには「教員1人1人が主体的に授業改善に取り組むためのシステム」と「目指す生徒の姿やそのための授業の理解」が不足していることに着目した。そこで、多忙の中でもこれらの課題の解決につながる校内研修の構築を目指した。

3 課題解決に向けた手立ての構築

発見した課題を解決するために、どのような方策を取り入れるべきかを考え、校内研修の事前実践を行った。

(1) 課題解決に向けての方策

「目指す生徒の姿やそのための授業」を理解するためには、教員1人1人が、具体的な生徒の姿や授業の場面を理解する必要がある。また「教員1人1人が主体的に授業改善に取り組むためのシステム」を構築するためには、授業者が、どのような授業を目指していけばよいのかを理解し、そのような授業を目指していけるように、学校全体で共通した授業の枠組みが有効であると考えた。

以上から、校内で1枚のセルフチェックシートを作成し、活用することを考案した。なお本研究の課題意識から、セルフチェックシートの作成にあたって次の2つの視点を取り入れた。

① リフレクションの視点

校内研修において、授業力の向上には、直接的な指導方法を明示するのではなく、自分の授業をリフレクションする場面を設定することが有効である。そこで自身の授業後に、事前にイメージしていた目指す生徒の姿と実際の授業の生徒の姿を比較して、自身の授業をリフレクションできるようにした。

② UDLの視点

UDLでは「学びのエキスパート」(expert learner. 目的を持ち、やる気のある学習者のこと)の育成を目指しており、この「学びのエキスパート」の育成が、資質・能力を主体的に発揮する生徒の育成に合致すると考えた。そこで「UDL実

践者の成長のルーブリック (2018)」を参照してセルフチェックシートを作成した。

(2) セルフチェックシートの開発

実習校で活用する1枚のセルフチェックシートを開発するためには、実習校の生徒の姿を基に「目指す生徒の姿」を作成することが必要である。そこで、実習校の校内研修に関連させながら、以下の①～④のプロセスで、「目指す生徒の姿」を作成するとともに、セルフチェックシートを作成した。

① 「目指す生徒の姿」の見本の作成

実習校で「目指す生徒の姿」を作成するためには、どのような場面でどのような姿を作成していくのかという見本が必要である。そこで教員(教職大学院修了生の中学校教員)の授業実践のビデオデータを分析した。複数教科の、複数の授業実践を分析することで、「目指す生徒の姿」を作成するための見本を作成した。

② 実習校の教員による「目指す生徒の姿」の作成

実習校で「目指す生徒の姿」を作成するために、まずは実習校の教員1人1人が「目指す生徒の姿」を作成した。自分が実施予定の研究授業の構想から、①で作成した見本を基に、「目指す生徒の姿」を抽出した。

③ 授業後のリフレクション

②で作成した、研究授業における教員1人1人の「目指す生徒の姿」が、実際に研究授業で現れたのか、そして実習校の「目指す生徒の姿」となり得るのかを検討するために、筆者と授業者がリフレクションした。筆者が実習校の教員の授業を参観するとともに、生徒の姿や授業者の手立てをビデオ録画しておく。そして授業後に、筆者と授業者で授業のリフレクションを行う。筆者が録画したリフレクションビデオを見ながら、筆者と授業者で考えを交流する中で「目指す生徒の姿」の理解を図った。

④ セルフチェックシートの精緻化

「目指す生徒の姿」や授業像を実習校で理解しやすいものにするために、全教員の授業から抽出した「目指す生徒の姿」や授業像の中から、実習校で理解しやすいものを抽出した。そしてセルフチェックシートを作成した。

4 セルフチェックシートの校内研修への活用に向けて

これまでのセルフチェックシートを作成している段階では、授業者は筆者とともにセルフチェックシートを使用していた。ただしセルフチェック

シートは、教員1人1人が自分で活用するために作成している。そこでセルフチェックシートや運用方法を改良した。

(1) 研究授業における検討

セルフチェックシートは普通の授業で使用するために作成しているが、従来の研究授業でも使用可能であるべきである。そこで筆者自身が研究授業を行い、従来の研究授業でもセルフチェックシートが使用可能であるかを検討した。

その結果、①授業前に、「授業前に記述する」という項目で、どのような生徒の姿を目指すのか、またそのために本時では教員がどのような手立てを取り入れるのか、を記述する。②授業後に、「授業後に記述する」という項目で、授業前に記述した目指す生徒の姿が見られたかどうか、を省察する。

以上の2つの活動を取り入れることで、従来の研究授業で大切にすべき「目指す生徒の姿」の省察につながる事が明らかになった。

(2) セルフチェックシートの活用方法の検討

実習校において、セルフチェックシートが実際に普通の授業でも活用しやすいのかを検討するために、実習校の数名の教員の普通の授業ビデオを対象として、セルフチェックシートの活用をシミュレートした。すると、セルフチェックシートは5つの項目(「①ねらい」「②方法の工夫」「③自分の考え」「④学び合い」「⑤振り返り」)で構成されているが、授業者がすべての項目を考えて授業実践することは困難であることがわかった。そこで、自分で5つの項目の中から項目を1つ選択することにした。

そしてセルフチェックシートの具体的な活用の流れを以下のようにした。

ア 授業前

5つの項目(「①ねらい」「②方法の工夫」「③自分の考え」「④学び合い」「⑤振り返り」)の中から項目を1つ選択する。生徒のどのような姿を目指すのかについて、具体的な姿を記述する。またその時に、教員自らがどのような手立てを取り入れるのかを記述する。

イ 授業後

「効果的な学習支援だった」「学習支援は改善すべきだった」のいずれだったのかを自分で省察する。「学習支援は改善すべきだった」の場合は、改善案を書く。

(3) 運用面の検討

セルフチェックシートを実際の校内研修に組み込むために、セルフチェックシートの先行実践研

究を行った実践者（修了生）にインタビューをして、それを基に運用方法を検討した。その結果、使用頻度は実習校が多忙であることを考慮して、1ヶ月半から2ヶ月に1回程度とした。また、実習校の教員に研究の価値を理解してもらうために、校内研修のテーマに関連付けた。

上記(1)～(3)の検討を経て、最終的に図1のセルフチェックシートを活用した校内研修を実習校に提案した。

5 校内研修の実施と考察

実際にセルフチェックシートを校内研修に組み込み、セルフチェックシートを活用して校内研修の課題解決となり得るかを検証した。

(1) 校内研修の実施

実習校において、セルフチェックシートを活用した実践を、計2回行った。

① 1回目の実践について ア 「授業前」について

夏季休業中の校内研修で、実習校の教員に研修方法を提案した。「授業前」に各自が入力するシートは校内ネットワークのフォルダ内に入れておき、いつでも入力できるようにしておいた。セルフチェックシートの活用では、教員1人1人が5つの項目の中から自分で項目を1つ選択した。そしてその項目に関して、「(2)授業前に記述する」の欄を入力していた。研修方法を提案した後の数日間で、数名の教員がすぐに入力していた。教員の中には、「これだけ入力すればいいの?」と、入力する項目が少ないことを筆者に質問する教員もいた。「(2) 授業前に記述する」の生徒の姿を記述する欄(図1の※2の欄)には、生徒の具体的な姿が記述されていた。

(1) 項目を決定する (教員の行動)			(2) 授業前に記述する				(3) 授業後に記述する	
項目	何のために	何をするか	本時では何をしますか ※1	※1の選択肢の例	「基礎力がある」とみなせる生徒の姿はどんな姿ですか。 ※2	※2のチェック項目の記述例	チェック	効果的な学習支援だった⇒○のみ。学習支援は改善すべきだった。⇒△を書いて改善案を書く。
1 ねらい	生徒1人1人が取り組む内容を理解するために。	生徒と本時のねらいを共有する。		① ねらい ・まとめの提示 ② 追究したくなる学習課題		・ワークシートや黒板を手がかりに、何をすべきかがわかって取り組んでいる。		
2 方法の工夫	生徒が自分に合った方法で、問題に取り組んだり試してみたりするために	生徒が学ぶ方法(教材、学習形態)を工夫する。		③UDの視点からの学習支援 ④ペア・グループ活動		・政治に参加することを体感するために、裁判員裁判を実演している。		
3 自分の考え	生徒が自分に合った方法で、自分の考えを表現できるように。	生徒が自分の考えを表す場面を設定する。(わからないもOK)		⑤ミニホワイトボード ⑥まなボード		・実験に対して「お化け屋敷みたい」と素直に述べている。		
4 学び合い	生徒がお互いに意見を出し合えるために。	生徒が関わり合い、考えを深める場面を設定する。		⑦話し合いグラドルール ⑧オープンクエスション		・「～ってどういうこと?」「～は?」と、自分から質問する。		
5 振り返り	生徒がねらいに対して得た知識や学び方、今後の授業への意欲などを表現するために。	生徒が本時のねらいに即して振り返る機会を設定する。		⑨振り返り		・導入時のねらいを基に、達成状況について振り返っている。		

図1 セルフチェックシート(記述例の一部は省略)

イ 「授業後」について

「(3) 授業後に記述する」の欄は、授業後に「効果的な学習支援だった」「学習支援は改善すべきだった」のいずれだったのかを自分で省察し、「効果的な学習支援だった」場合は○をつけ、「学習支援は改善すべきだった」場合は△をつけて改善案を記述することにしていて。すると、数名の教員は、「学習支援は改善すべきだった」として表1のような改善案を書いていた。

表1 「授業後に記述する」の記述例

どのように方程式を解いたのかを、じっくりと説明する時間を確保できなかった。

例題で考えを言葉にし、整理しながら説明を行うようにする。

英作文においてターゲット文法をしばっておらず、生徒が話し合いの中で得た気づきが多くなかった。(改善案) ターゲットになる文法をしばる。

このように改善案を記述した教員は、生徒の主体的な姿が現れるために、どのように学習支援を改善すべきかを具体的に挙げていた。

② 2回目の実践について

2回目の実践は締切日などを設定せずに、各自のペースで取り組んでもらった。すると数名の教員が積極的に取り組んでいた。実践した2人の教員と会話したところ、どちらの教員も授業の様子について詳細に説明してくれた。また2人とも、1度実践した後にその授業を省察し、その省察を別の学級の実践に活かしていた。その後、2人とも「またやりますよ」と、セルフチェックシートに好意的な感想を述べていた。

(2) アンケートの実施

セルフチェックシートの使用する教員がよさを実感したかどうかを検討するために、アンケートを実施した。

アンケートの各項目結果を分析すると、「生徒の姿をイメージして授業を実践することができる。」

「授業後に、自分が書いておいたことを基にして自分の授業を振り返ることができる。」「自分の実践をメモ等で蓄積していくことは大切である。」の項目について、肯定的評価の割合が高かった。

(3) 総合的考察

授業前に記述する場面では、少なくとも自分が取り組む項目を選択して案を考えていたという点で、自分の授業に主体的に関わっていたといえる。また「目指す生徒の姿」が具体的に記述されていた。このような具体的な姿の記述を蓄積していくことで、理解が深まると考えられる。

授業後に記述する欄については、「学習支援は改善すべきだった」と記述する教員が数名いた。これらの教員については目指す生徒の姿からどのように学習支援すべきだったかを省察しており、主体的に授業改善に取り組む姿勢が身に付いているといえる。また「効果的な支援だった」として○を付けた教員も、自身の授業について授業前に目指す生徒の姿を記述し、授業後に目指す生徒の姿と比較して○を付けていた。したがって授業後に自分の授業を省察する機会を設定することができた。

2回目の実践で「またやりますよ」と、好意的な感想を述べた教員が数名いたことから、セルフチェックシートは何回か活用することで、よさがより実感できるのではないかと考えられる。

① 教員1人1人が主体的に授業改善に取り組むためのシステムの不足について

2回目の実践を行った教員は、実践の省察をセルフチェックシートに記述しておき、同じ授業を別の学級の実践につなげていた。このことから、自分の授業を俯瞰することができていたと考えられる。そして自分の行為を蓄積することは、教員自身の自己調整力の伸長にもつながると考えられる。したがって、セルフチェックシートの使用は、主体的な授業改善に効果的に働くのではないかと考えられる。ただし、即時的な効果をもたらすものではないことには留意する必要がある。

② 目指す生徒の姿やそのための授業の理解の不足について

2回目の実践を行った教員の発言から、何回か行っていくうちに、セルフチェックシートを活用するよさを実感し、どのような生徒の姿や授業を目指すのかについて、理解していくと考えられる。したがって、何回かサイクルを回すことで、より効果が期待できると考えられる。

6 まとめと今後の展望

本研究は「教員1人1人が主体的に授業改善に取り組むためのシステムの不足」と「目指す生徒の姿やそのための授業の理解の不足」という2つの課題の解決を目指した。

どちらの課題に対しても、解決につながる可能性を見いだせた。ただし、即時的な効果が期待できなかったり、何回かサイクルを回すことでより効果が期待できたりすることから、長期的な視野に立った研修が必要である。今後も内容面と運営面の両方の視点から校内研修を構築していきたい。